

Akatake Times

青空に入道雲が高く伸びゆく季節の到来です。
またそれは同時に、暑さと湿気の季節の到来とも言えます。
年々暑さを増す感もある夏ですが、熱中症にならないよう、常に気をつけていきましょう。



『ハエトリソウとアマガエル』



夏が近づくと、私の植物コレクションの近くにはカエルがたくさん集まってきます。よく勘違いされますが、ハエトリソウは虫を引き寄せたりはできないので、虫の横取り目当てで集まることはありません。睡蓮や食虫植物など水がたっぷり必要な植物が多いので、近くの田んぼから遊びに来ているのでしょう。写真はアマガエルですが、たまに最近あまり見かけなくなったトノサマガエルなんかも見かけます。水をあげる時にぴょんぴょんとカエルが出てくる様子は非常に癒されます。

撮影日時：2018年 6月 3日

撮影と文：品質保証部 杉山さん

◆時の進みを実感します

私は、奉仕団体である沼津ライオンズクラブに所属しています。入会して23年目を迎えて、ベテランの域に入ってきました。いま、年齢順で上から数えると15番目。最年少で入会した頃から様変わりです。諸先輩は、亡くなったり高齢ゆえ退会されたりしています。当然と云えば当然ですが、時は間違いなく進んでいることを実感します。

◆「120学会」

仕事や趣味で培った特技や技能を地域発展に生かそうと、県西部で活躍する70歳以上の住民が「120学会」を2年前に発足させ、講習会や技能指導をするほか、行政への提言活動も行っています。大還暦の120歳まで生きることを名称に掲げ、残りの人生を世のため人ために尽くし、元気よく健康に過ごしたいと活動されています。70歳以上なら誰でも入会でき、入会金は不要とのこと。仕掛け人は、経営総合の中村英勝先生。

核家族化した家庭で育つ子供たちと120学会の会員の方々のような元気なお年寄り(失礼)との融合などは意義あることと思います。礼節をわきまえた、人の痛みが分かる、思いやりのある子供たちが育つと確信するからです。

◆人生100年時代を見据え

日本経済新聞の5月29日付記事で、『自民党は29日、「人生100年時代」を見据え、定年のない「エイジフリー社会」の構築などを求める政府への提言をまとめた。高齢者の定義や名称の見直しも提案した。年齢ではなく経済力に応じた医療費負担や年金の支給開始年齢の柔軟化といった社会保障制度の抜本改革につなげる狙いだ。政府に来年末までに改革案と工程表をとりまとめるよう要請した。国立社会保障・人口問題研究所によると2024年に日本の人口の過半数が50歳以上になる。提言はこれを「2024年問題」と位置づけ個人の生き方や終(しま)い方を見直すことが求められる』とあります。高齢者の定義を変えようという動きの背後には、年金の支給開始年齢を70歳に引き上げようとする政府の方針があるとの意見もあります。



◆平均年齢70歳の会社

東京に(株)高齢社という会社があります。定年を迎えた方々が登録している人材派遣会社です。400名ほどが就労していて平均年齢が70歳とのこと。その会社が掲げている行動指針に

1. あいさつは自分から。派遣先企業の立場になり、新人社員のつもりで。
2. たとえ上長がかつての部下でも、「さん」付けで。現役時代の職位・資格はいわない。
3. 過去の成功談(自慢話)はいわない。派遣先社員には教えていただくという姿勢で。
4. 自分でできることは、進んで自分からする。
5. 自分の役割を自覚し、仕事は完全にやり切る。
6. 過去の知識・経験を活かしつつ、謙虚な気持ちで仕事に取り組む。
7. 作業災害・交通事故、作業ミスが発生防止に努める。
8. ユニフォーム、身だしなみは常に清潔に。
9. 自分以外はお客さま。自分の給料はお客さまからいただいていることを忘れない。
10. かつての部下も、後輩も、いまはすべてお客さまという意識を。
11. 身辺はきれいに。人は常に厳しく見ていることを忘れずに。

以上の11項は、組織の中にあって守るべき姿勢は、年を重ねても基本は変わらないですね。この会社は、以下の3点も掲げています。含蓄のあるメッセージです。

- ・言葉で人を導く人 尊し
- ・働く姿で人を導く人 さらに尊し
- ・後ろ姿で人を導く人 もっとも尊し

◆私もまだ69歳

今月は、主に高齢化社会について書きましたが、若い方々も現実を直視し、将来を見つめ公私ともに充実した人生を過ごしてほしいと思います。時間は、過ぎてしまうとあっという間ですが、これからの時間はたっぷりあります。私もまだ69歳です。元気な大先輩などの活躍を知るにつけ、老害にならないように100歳まで生きて社会に貢献したいなあと思ってしまいます。

今期もあと2ヶ月あります。極力、やり残しが無いよう頑張りましょう。ご安全に！！

代表取締役社長 赤堀 肇紀